

保育者養成教育における学生参加型地域活動の意義

濱 田 尚 吾 幼児教育科

(2009年10月1日受理)

〔 要 約 〕

本研究では、本学で取り組んでいる地域での活動「たかだまネットワーク」の小学生を対象とした企画「長岡っ子あつまれ!遊び塾」に参加した学生にアンケート調査を実施し、保育者の養成において、地域活動への参加がどのような意味を持つのかについて検討し、次の結果が得られた。

- 1) 地域活動への参加によって学生は自らの保育士としての資質や個人の資質に肯定的な変化を感じている。
- 2) 地域での活動体験が学内での学習の素地となる学びの意欲や学内では学びきれない多様で広範なコミュニケーション力を高める機会としても有効であることが示された。

I. 問題と目的

敬語が使えない、店先に座り込む、マナーの低下、モラルハザード、主に若年層の現状を危惧した言葉がしばしば聞かれる。これらは子どものコミュニケーション能力の低下としてとらえられ、現在の学生の世代を含め、全国的な問題として認識されている。その要因には核家族の増加等による地域コミュニティの形態の変容や携帯電話やパソコンをはじめとするITツールの普及によるコミュニケーションのあり方の変容が挙げられる。それらのITツールは瞬時に遠い世界につながり、同時に閉じた世界で成立するという性格も持つ。コミュニケーションの基本ともいえる顔を見てのやりとりではなく、お互いの顔も名前も知らない人とのやり取りも可能であり、その成立には他人の介在が少ないのも特徴である。その点ではコミュニケーションの対象は飛躍的に広がったともいえる。そのような環境が一般化してきたともいえる昨今、幼い頃からそういった環境がごく自然であった若年層のコミュニケーション能力は低下したととらえるより、社会の変容にあわせて変容したと考えるべきだろう。低下と捉えられているのは直接的な顔を向き合わせるようなコミュニケーション能力であり、それらが育ちにくい環境に育った学生であれば、保育者養成にあたってのカリキュラムは学生の現状の姿に応じて考慮されなければならない。本学においては18年度から学内FD活動の一環として月例でFD懇談会を開き、全教員参加の下でそれぞれの考え等を話し合う場を持ってきたが、その中でも上記のような学生の質の変容についての発言が少なからずあった¹⁾。全国的に叫ばれている問題は、本学においても感じられている。時代が変

わろうとも保育士や幼稚園教諭、福祉従事者はいずれも顔を向き合わせて豊かなコミュニケーションができることが何よりもまず大切な資質である。変わり行く社会の中で、変わらないでいてほしいものを、世代を超えて伝えていくのが保育であり、教育ではないだろうか。その保育者を養成していく教育環境として、保育者を目指す学生たちに、何を留意し伝えられるだろうか。

また、保育士は現行の保育指針²⁾にもあるように幼児の保育のみならず、保護者に対しての子育て支援、地域の子育て支援の中心となるべくその能力・資質を求められている。地域コミュニティの中心としての役割は現在の家庭のあり方などの社会状況を鑑みるに、今後その傾向は強まるであろう。より広範なコミュニケーション能力が求められているのである。その役割を将来担うことになる学生にとって、実習だけではなくより豊富で多様な体験の場が必要なのではないか。これらが本研究の出発点である。

保育士の資格を取得するにあたって、学生は様々な施設に実習に出る。学外に出ての実習ということで、事前には多くの学生に不安が見られる。齊藤、大木(2008)の本学学生に対する実習に対する意識調査にも実習前の不安について「指導教員との関わり方」、「対象児との関わり方」、「対象児とのコミュニケーション」といったコミュニケーションに関わるものが、保育技術等の問題に次ぐように高い数値で見られており、「これより、人間関係を築いていくことに関して戸惑っている様子が伺える。その結果、質問事項があっても尋ねることが出来ず、問題を解決しないまま実習を終えてしまうことも予想される³⁾」とある。コミュ

ニケーションが円滑に進むかどうかは実習での学びに大きな影響を与えていることが示唆されている。

一方で、学生の任意で行ってきたサークル活動やボランティア活動等、課外での活動の中でコミュニケーションについて自信をつけている姿を感じることがある。しかし、その成果は学生の様子で感じるという点にとどまっており、具体的な検証がなされていない。そこで、そのような場として学外（地域）での活動の場を意図的に設定し、それらの活動によって保育者としての意識や能力の変化が学生にどのように意識されるかを追ひ、将来的には保育者養成カリキュラムへの反映によって組織的・継続的なものとしていくことを見据え、保育者養成における地域活動プログラムの効果を検討していきたい。今回の研究では本学独自の取り組みとして19年度から行っている「たかだまネットワーク」の中で地域の周辺施設と協力して行ってきたイベントに参加した学生の姿を追うことで検討を深めていく。

「たかだまネットワーク」とは本学のある天童市の南部地域のいくつかの施設やコミュニティと連携する関係性を構築し、ひとつはその中で地域の中の高等教育機関として地域に貢献すること、もう一点はその中で学生を育てることを目的に構想されたものである。実践的には、近隣小学校における本学教員の出前授業や地域公民館（子ども会、地域づくり委員会など）との企画の共催などを行っている。それらの活動を通して育成を狙う学生の諸能力とは、まず学生の社会性である。学生にとって地域の中で第三者的な異世代の人と交流を持つ機会は、そのコミュニケーション能力、社会性を育む上で有効となると考えた。本学の学生が目指す幼児教育者、保育者、福祉従事者にとって触れ合う対象者は個別、個性的な存在である。地域での様々な場での様々な人との交流や人と人をつなぐ人的環境としての役割を果たすことは、多様性に対応できる保育者としての資質の向上に寄与できると共に、世相の変化に伴う保育者に求められる社会的なニーズの変容に対応しうる感受性の育成もあわせて期待できると考えている。集団での参加という形をとることや地域という集団の中に入って行くという性格上、集団の中で個を生かすという経験により、自分の社会参加のイメージを持つ。さらに学内の活動より冷静な評価を受けることによる自己評価の場としても有効となり、学びの姿勢の育成につながるのではないだろうか。学生が社会に出て行くに当たり必要な素地であり、社会の中でさらに成長していくための土壌とも考えられるこれらの資質・能力の育ちを期待したものである。

この項の最後に活動の場を地域に求めた理由について

てふれておきたい。ひとつはそこが緊張感のある生きたコミュニケーションの場になるからである。学生は学内にいる限り、学生として生活できる。この活動においても、短大で設定している以上その傾向が全くないとは言いきれないが、地域の中で様々な世代の人と触れ合うことで学生は様々な角度から見られることになる。この活動の今後の展開において忘れてはならないポイントである。単に学生のボランティアとしてではなく、地域の中の一員として参加する意識をもてるような働きかけが求められる。もう一点として、地域の人付き合いの在り方は、数十年単位では劇的に、ここ数年でも少なからず変容してきた。それは情報化社会の現在、都市部に限ったことではない。狭義の「生活」において、地域の中での人付き合いの必要性は軽くなってきたということといえるだろう。地域の中で人間としての様々な力を育んできたことは、便利で合理的な世の中に向かう中で後回しにされてしまった。そこで、その傾向を補う動きとして先にも少し触れたが、保育指針や教育要領を見るに、保育所や幼稚園が地域再興の中心的役割を期待されているように思える。様々な人が交流する場となる保育所や幼稚園。将来その場にいる学生たちに「地域」というものを意識するきっかけとして、さらにはその中で自分をイメージするきっかけとしてこれらの活動の有効性があると考え今回の調査に至った。

II. 方法

- 1、対象者 平成20年度のたかだまネットワーク関連行事に参加した学生（のべ51名）
- 2、イベント実施期日（同日事後にアンケート実施）と概容

	タイトル	期 日	内 容	参加学生数
試	造形遊び体験 (長岡小学校での出前授業)	平成20年 3月12日	木片を使った遊び	10名
1	長岡っ子あつまれ！遊び塾	平成20年 6月7日	紙飛行機・割りばし鉄砲・木片遊びなど	10名
2	長岡っ子あつまれ！遊び塾	平成20年 8月23日	川遊び	6名
3	長岡地区子ども会秋季レクレーション大会	平成20年 9月21日	公式輪投げ	8名
4	長岡っ子あつまれ！遊び塾	平成20年 10月25日	バウムクーヘンづくり・スタンプ遊びなど	10名

なお「長岡っ子あつまれ！遊び塾」は天童市長岡地区地域づくり委員会放課後子ども教室部会が主催するイベントで本学教員が企画段階から参加している。初回の「造形あそび体験」はネットワークの意義を関係機関の中で確認するために試験的に行った企画である。また3回目のイベントは子ども会が主催するイベント

であったが、性質が類似しているため同様の活動として捕らえた。各回の参加学生の募集については、活動が企画されたら随時、学内掲示等で募るといった形をとった。

3、アンケート内容

アンケートの内容は以下のとおりであるが、試験的に行った初回の天童市立長岡小学校での本学教員による出前授業の際は、より簡単なアンケートを行っている。

【地域ネットワーク 活動後のアンケート】

- ①今回の活動は自主的な参加ですか？
はい・いいえ
- ②子どもとうまく関わりましたか？
関わった・ある程度・あまり関われなかった・関われなかった
- ③活動は楽しかったですか？
とても楽しかった・まあまあ楽しかった・あまり楽しくなかった・楽しくなかった
- ④今回の活動で自分のどのような能力が向上したと感じますか？（複数回答可）
A 保育能力 B コミュニケーション能力
C 社会性 D 遊びの知識
E 特に向上したとは思わない
F その他（ ）
- ⑤活動の前と後では地域への考え方が変わりましたか？
とても変わった・ある程度変わった・あまり変わらなかった・全く変わらなかった
変わったという方→具体的には、どんなところが？
- ⑥幼児と小学生の違い（子どもたちの様子やこちらの関わり方の違い）を感じましたか？
感じた・あまり感じなかった
感じたという方→具体的には、どんなところが？
- ⑦次回も参加したいですか？
とてもそう思う・ある程度そう思う・あまり思わない・全く思わない
- ⑧地域の中で、今後どんな活動をして見たいですか？
- ⑨その他 ご意見・ご感想等あれば自由に記述ください。

III. 結果と考察

初めに、試験的に平成20年3月12日に行った「造形遊び体験～木片を使った遊び」についてのアンケート結果から、その実践が学生にとって持つ意味を捉え、更にアンケート項目を再考した。そしてその項目からなるアンケート結果から、平成20年6月7日以降4回行われた「長岡っ子あつまれ！遊び塾」の教育的意味

を検討する。以下に、その内容を示す。

1. 「造形遊び体験～木片を使った遊び」について
各アンケート項目についての結果は次の通りである。なお、表の数字は人数を、（ ）内の数字は、各回の全参加者に占める％を示す。

1-1. 自主的な参加か、非自主的な参加か。

自主的な参加	10 (100.0)
非自主的な参加者	0 (0)

1-2. 子どもと積極的に関わったか。

とても出来た	7 (63.6)
ある程度出来た	4 (36.4)
あまり出来なかった	0 (0)
全くできなかった	0 (0)

1-3. 子どもとうまく関わられたか。

関わった	2 (18.2)
ある程度関わった	6 (54.5)
あまり関われなかった	3 (27.3)
関われなかった	0 (0)

1-4. 活動は楽しかったか。

とても楽しかった	8 (72.7)
まあまあ楽しかった	3 (27.3)
あまり楽しくなかった	0 (0)
楽しくなかった	0 (0)

1-5. 活動に参加して保育能力が向上したと感じるか。

とても感じる	2 (18.2)
ある程度感じる	3 (27.3)
あまり感じない	6 (54.5)
全く感じない	0 (0)

1-6. 活動の前後で子どもへの考え方が変わったか。

とても変わった	4 (36.4)
ある程度変わった	3 (27.3)
あまり変わらなかった	4 (36.4)
全く変わらなかった	0 (0)

1-7. 次回も参加したいか。

とても参加したい	9 (81.8)
ある程度参加したい	2 (18.2)
あまり参加したくない	0 (0)
全く参加したくない	0 (0)

以上の結果から、「造形遊び体験」のすべての参加者が自主的な参加であり、当該体験において、子どもと積極的に関わり、活動を楽しみ、次回への参加希望を持つことが示された。当該体験を通して、子ども達とのコミュニケーションを図り、その楽しさを知って更なる機会に意欲を持つという参加者の姿が伺え、当該体験が学生にとって好ましい影響を与えているものと考えられる。

しかし、保育能力、子どもへの考え方についての解答にはばらつきが見られ、具体的にどのようなことを感じ、考えたのかという情報を得るには至らなかった。そのため、この取り組みのそれらへの影響がいかなるものかをより明確に把握できるよう、「長岡っ子あつまれ！遊び塾」に参加することで地域への考え方の変化や保育能力の向上が感じられたとすればそれはどのようなものか、幼児と小学生の育ちやコミュニケーションのとり方の違いについてどのような気づきがあったか、更に企画を進めるとすればどのような企画への参加意欲が見られるか、といった自由記述項目を加えることとした。一方で、子どもとの関わりについて内容の類似した質問項目をひとつにまとめ、簡略化した。

上述の過程を経て用意されたアンケート調査の結果から検討した、「長岡っ子あつまれ！遊び塾」への参加が学生にもたらした影響について、以下に示す。

2. 「長岡っ子あつまれ！遊び塾」（以下「遊び塾」と記述する。）について

平成20年度に4回にわたって実施した「遊び塾」のアンケート結果は次の通りである。なお、表1、2、3、4、5、6、8、10における（ ）内の数字は、各回の全参加者に占める％を示す。また、表7、9、11、12は、自由記述内容を類型化し、各タイプの記述人数の4回合計数を示したものである。

2-1. 自主的な参加か、非自主的な参加か。

表1 各回の自主的・非自主的参加者人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
自主的な参加者	10 (100.0)	6 (100.0)	6 (75.0)	11 (78.6)	33 (86.8)
非自主的な参加者	0 (0)	0 (0)	2 (25.0)	3 (21.4)	5 (13.2)

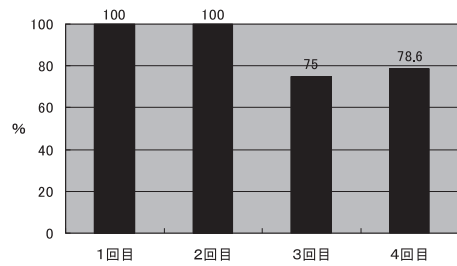


図1 自主的な参加者割合

2-2. 子どもとうまく関わられたか。

表2 子どもとの関わりについての回答別人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
関わられた	5 (26.3)	0 (0)	2 (25.0)	6 (42.9)	13 (34.2)
ある程度関わられた	5 (50.0)	3 (50.0)	5 (62.5)	8 (57.1)	21 (55.3)
あまり関わられなかった	0 (0)	3 (50.0)	1 (12.5)	0 (0)	4 (10.5)
関わられなかった	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

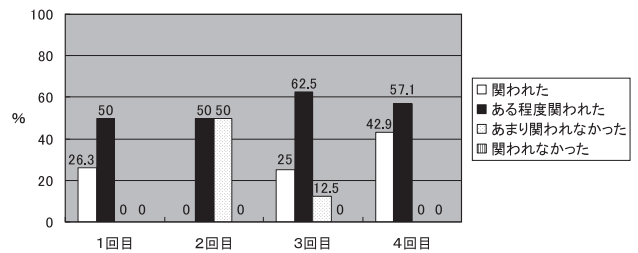


図2 子どもとの関わりについての回答別人数割合

2-3. 活動は楽しかったか

表3 活動の楽しさについての回答別人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
とても楽しかった	9 (90.0)	3 (50.0)	3 (37.5)	12 (85.7)	27 (71.1)
まあまあ楽しかった	1 (10.0)	3 (50.0)	5 (62.5)	2 (14.3)	11 (28.9)
あまり楽しくなかった	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
楽しくなかった	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

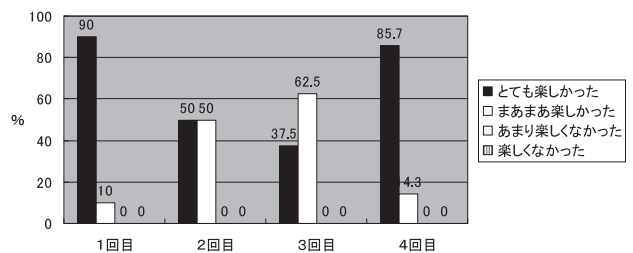


図3 活動の楽しさについての回答別人数割合

2-4. 活動に参加して能力の向上があったと感じるか。

表4 能力向上の実感有無別人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
能力の向上あり	9 (90.0)	6 (100)	8 (100)	14 (100)	37 (97.4)
能力の向上なし	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2.6)

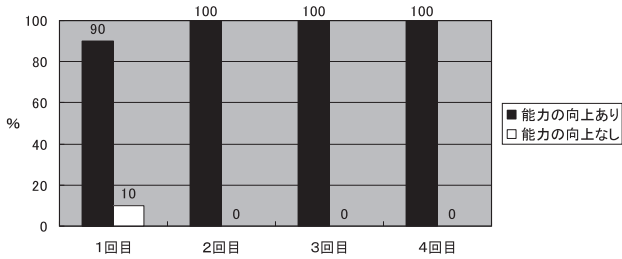


図4 能力向上の実感有無別人数割合

表5 実感された能力のタイプ別人数 (複数選択)

	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
保育能力	1 (10.0)	0 (0)	1 (12.5)	3 (21.4)	
コミュニケーション能力	8 (80.0)	2 (33.3)	6 (75.0)	8 (57.1)	
社会性	3 (30.0)	3 (50.0)	0 (0)	7 (50.0)	
遊びの知識	5 (50.0)	4 (66.7)	1 (12.5)	7 (50.0)	
その他	0 (0)	0 (0)	2 (25.0)	1 (7.1)	

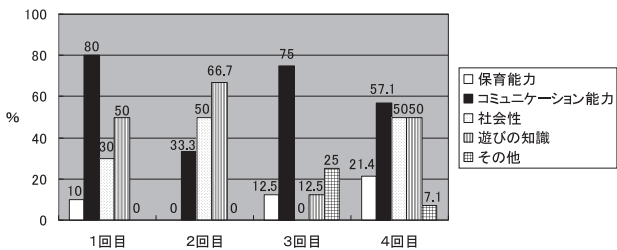


図5 実感された能力のタイプ別人数割合

2-5. 地域への考え方は変わったか。

表6 地域への考え方の変化についての回答別人数

	2回目	3回目	4回目	5回目	合計
とても変わった	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	2 (14.3)	3 (7.9)
ある程度変わった	8 (80.0)	5 (83.3)	6 (75.0)	9 (64.3)	28 (73.7)
あまり変わらなかった	1 (10.0)	1 (16.7)	2 (25.0)	3 (21.4)	7 (18.4)
全く変わらなかった	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

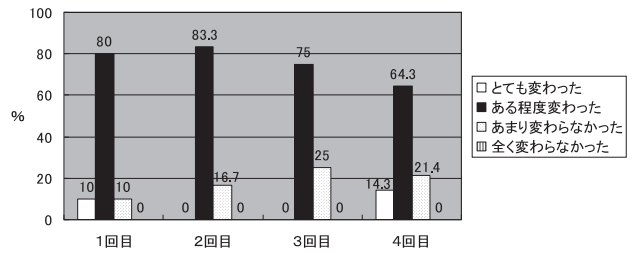


図6 地域への考え方の変化についての回答別人数割合

表7 考え方の変化の内容別合計のべ人数

地域交流への参加意欲	7
地域交流の存在についての実感	16
地域交流の楽しさ	5

2-5. 幼児と小学生の違いを感じたか。

表8 幼児と小学生の違いの実感有無別人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
感じた	9 (90.0)	6 (100)	8 (100)	12 (85.7)	35 (92.1)
あまり感じなかった	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	2 (14.3)	3 (7.9)

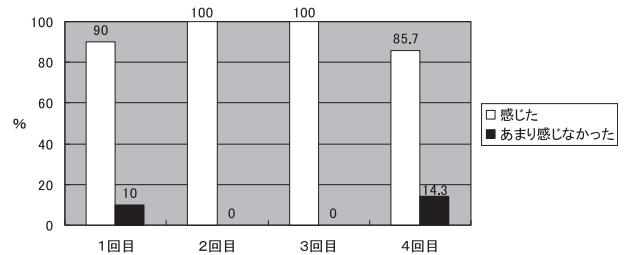


図7 幼児と小学生の違いの実感有無別人数割合

表9 実感された違いの内容別合計のべ人数

コミュニケーションのとり方	10
自主性	10
理解力	8
活動能力	6
持続性	3

2-6. 次回も参加したいか。

表10 次回の参加意欲についての回答別人数

	2回目	3回目	4回目	5回目	合計
とても参加したい	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	2 (14.3)	3 (7.9)
ある程度参加したい	8 (80.0)	5 (83.3)	6 (75.0)	9 (64.3)	28 (73.7)
あまり参加したくない	1 (10.0)	1 (16.7)	2 (25.0)	3 (21.4)	7 (18.4)
全く参加したくない	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

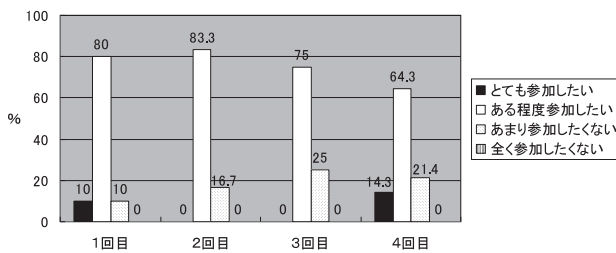


図8 次回の参加意欲についての回答別人数割合

表11 今後の活動についての提案内容別人数

具体的な名称を挙げての提案	21
人との関わりに言及した提案	10

2-7. 感想等の自由記述

表12 活動に参加した感想等の内容別人数

参加した楽しさ	13
うち、地域の人とのコミュニケーションについて言及したもの	8
今後の活動内容についての提案	10

表1、図1から、大多数の者が自主的な参加をしていることがわかる。各回のテーマは異なっているものの、各回を通して自主的な参加者の人数が高い割合を示している。機会さえあれば、学生は学外における交流の場に参加しようとする姿勢が見られる。

そして実際に「遊び塾」に参加した結果、子どもとの関わり(表2、図2)、活動の楽しさ(表3、図3)、能力の向上(表4、図4)に肯定的な反応をし、地域の考え方の変化(表6、図6)、幼児と小学生の違いについての気づき(表8、図7)が生じていることが示された。また、地域の考え方の変化についての自由記述(表7)から、その変化は、参加学生が地域交流の楽しさを知ったこと、地域交流がいかに行われ、地域住民にどのように受け止められているかといったその存在意義を知ったこと、更なる地域交流への参加意欲を持つようになったことであった。このことから、「遊び塾」に参加することにより、地域に対する学生の理解、関心、親近感、受容度が高まったものと考えられる。また、「遊び塾」に参加し交流する中で自然に、コミュニケーション能力を中心とした保育者として重要な能力の高まりを自覚していく(表5、図5)こと、コミュニケーションのとり方や自主性の程度等いくつかの面で幼児と小学生には違いが見られる(表9)といった、共に活動した対象者の特性を把握していくことが可能であることが示された。今後希望する活動内容、経験した活動の感想の自由記述(表11、12)からは、地域の人とのコミュニケーションに言及したものが見られ、地域の人とのコミュニケーションにより積

極性が出てきたことが伺える。

これらの結果から、「遊び塾」への参加が、保育士としての資質に関する部分(保育能力、コミュニケーション能力、社会性、遊びの知識、子どもの分析)や個人の資質(自主性、反省する力、活動への意欲)の育成に寄与し得ているものと考えられる。

IV. 討論

1. 学生の「地域観」について

表6、7、図6にはこれらの活動で多くの学生の地域への考え方が変わったことが表されている。その内容には「地域でこのような活動が行われていることへの驚き」がベースにあるものが最も多く、「地域の結びつきは希薄なのではないか」という予想が学生の中にあることが想像される。しかし、これらの活動への1回の参加でその考え方に変化が生まれていることから、それらの先入観は日常に実感されていることというよりは、マスコミ報道やニュース等による現代社会へのイメージによるものが強いと思われる。そこから、日常的には「地域」を意識し実感する機会が少ないということが伺える。

2. 活動の肯定的なサイクルについて

20年度から本格的に実施をスタートさせ、活動の回数も限定されていたことやより多くの学生に参加してほしいという意図もあり、学生は数名を除いて1回みの参加となっているが、アンケートの結果からは、多くの学生が活動中での自分の成長を感じ、次の活動に参加したいという意欲を持っていることが伺えた。それには自主的に活動に参加することが、まずそのきっかけとしてあるように思われる。活動の3、4回目には数名に「自主的ではない」という回答が見られ、それと「次回への参加意欲」と比較してみると、極端ではないものの3、4回目に「あまり参加したくない」という消極的な姿勢が比較的多い割合で現れている。3、4回目を含めすべての回において活動自体は「楽しかった」という肯定的な数値が現れていることから、「活動の楽しさ」より「参加の自主性」が「次回への参加意欲」につながっており、更なる成長のサイクルを学生のうちに芽生えさせる大きな要因になっていることが示唆される。

活動に対しての能動的な姿勢をどのように生み出していくかということが、今後の大きな課題となってくる。地域活動の持つ意義が受け入れられ、活動への期待感を高め、そこに適当な活動の機会があるというポイントを意図的に設定できれば、自主的に参加する姿勢が生まれると考える。活動の肯定的なサイクルが内

化し、継続的に参加することで、「関わり合いの深さ」や「関わり方の多様性」などといった一度ではなかなか気づかれない項目も生まれてくるのではと期待される。

3. 地域活動の更なる教育効果を求めて

今回の調査結果からは、保育士としての資質に関する部分（保育能力、コミュニケーション能力、社会性、遊びの知識、子どもの分析）や個人の資質（自主性、反省する力、活動への意欲）について肯定的に変化したことが学生に意識されていることが示されたが、活動のみに参加するのではなく活動の企画段階から参加することでより強い達成感や多様なまたは段階の上があった教育効果を生むことができるのではないだろうか。調査結果の中に「今後の活動への提案」が複数見られることから、少数にはなるだろうがそのような展開も可能だろう。

V. まとめ

山形には「あぶらっこ」（あぶらしこ）という方言がある。全国各地では「みそっこ」「みそっかす」とも呼ばれているが、遊びの集団の中でまだ十分に遊びには参加できない子どもに名づけられたものであり、その子どもはハンデをもらって遊びの輪に入る。その関係の中で育まれた年少者をいたわり、年長者にあこがれるといった豊かな心情は計り知れないものがある。厚生労働省が2007年の11月に発表した21世紀に生まれた幼児の生活調査（当時5、6歳）のデータには、その5割がテレビゲームをしているということやテレビの視聴時間の長さ、それに付随して友達が少ないという傾向があらわれていた。子どもが犠牲になるような

凶悪な事件が頻繁に報道され、子どもの安全を守ることが叫ばれる結果、関係が弱まった地域では守りきれない不安から、家の中に子どもが閉じていったのか。その要因はさておき、この事象はさらに人間関係の希薄化に拍車をかけるのではないか。そのような環境で育った子どもが形成する社会とはいかなるものであろうか。地域のあり方が変容しているのであれば、その地域が持っていた機能を補完できるものが必要になる。その担い手として期待されるものの一つに保育園などを中心として形成される「地域」がある。そこで働く保育士には地域コミュニティの中心的な役割が求められるだろう。その時に学生時代のこれらの活動の経験が原動力となるように期待したい。また、このように地域を再構築するというのも、保育者を養成する教育機関として、わたしたちに期待されていると感じる。本研究においては、地域の中での活動が保育者養成においてある程度の意義を見出すことが出来た。これらを学生の学びにいかに関与させてより高い効果をめざすこと、それを保育者養成カリキュラムに反映させることはどのようなことで可能かということを経験を今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 「FD活動報告書 平成20年度」2008：羽陽学園短期大学
- 2) 「保育所保育指針」2008：厚生労働省
- 3) 齊藤葉子、大木みどり：「実習の事前・事後指導に関する研究(V)－保育実習における1・2年次の不安意識とその問題について－」, 羽陽学園短期大学紀要 第8巻第2号, 2008年

SUMMARY

Shogo HAMADA:

The Significance of the Community Activities Participated by the Students
in Cultivating the Child Care Person

This study aimed to examine the significance of the community activities participated by the students in cultivating the child care person. The community activities were called “Nagaokakko Atsumare Asobijuku”, which was a part of our college work “Takadama Network”.

The results of the questionnaire on the students were summarized as follows:

- 1) The participation in the community activities enable affirmative changed on the student's nature as a Child Care Person and an individual character.
- 2) The community activities participated by the students were effective to raise a will of study and an ability of communications.

(Uyo Gakuen College)